

伏見における舟運を基軸とした都市形成に関する研究

京都大学大学院 学生員 守津真麻
 正会員 田中尚人
 正会員 川崎雅史
 都市基盤整備公団 正会員 鶴川登紀久

1. 研究の目的

伏見は、近世には高瀬川、近代には琵琶湖疏水（鴨川運河）といったインフラストラクチャーが挿入された地域である。伏見は重要なノード（node）として位置付けられ、交通・輸送の要衝としてターミナル（traffic terminal）が造られた。本研究の目的は歴史的な文献・資料をもとに、近世伏見において人々の生活に結びつき都市の魅力にあふれていた運河空間が、近代のインフラストラクチャーとの関わりの中でどのような変化を遂げたのかを、主として舟運に着目し、都市史的側面により明らかにすることである。

2. 近世舟運を基盤とした都市モデル

宇治川の付け替えや堤防・街道の整備といった伏見の骨格を形成した大土木工事や、京都へと繋がる高瀬川運河の開削、中書島の港湾化といった舟運を主軸とする一連の整備によって伏見の港湾機能の基盤は整った。

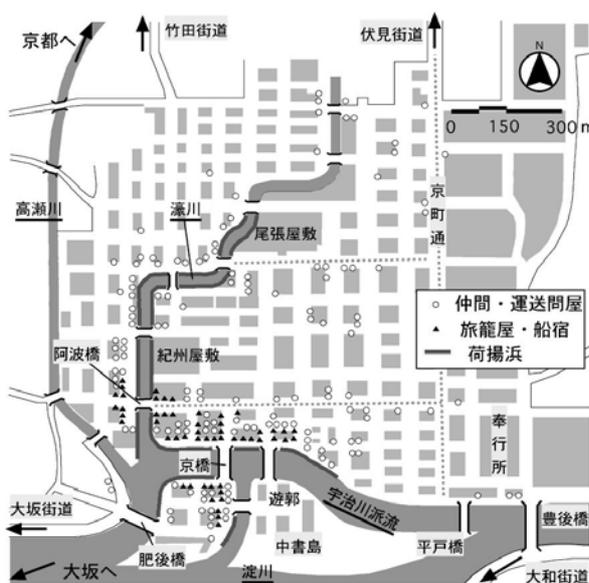


図-1 近世伏見の都市施設の立地

運河空間を中心とした都市モデル（図-1 参照）として以下の要件を整理した。

- (1) 物流・旅客のノード
- (2) 都市施設の集積
- (3) 機能とアメニティ

運河空間には都市の魅力といえる人々の生活に密接に結びついた諸活動の場が多く存在していた。運河空間は、商業活動に伴う貨物輸送の施設のほか、旅客の集積による船宿等の遊興施設も整備され、貨客両面で運河空間は近世都市伏見とのインターフェイスとして機能していた。

3. 近代舟運と伏見の発展

3.1 琵琶湖疏水舟運と伏見

琵琶湖疏水は 1890 年（明治 23）4月に竣工、京都・伏見間の新運河としては鴨川運河が伏見の中心部である濠川へと接続されることとなった。しかし伏見にとっては諸施設のほとんどが京橋周辺（南河岸）と濠川沿岸（西河岸）の運河空間に多く立地したままだったことから明らかなように、高瀬川と鴨川運河という2つの輸送路が存在したことは大きく都市構造に変化をもたらすまでには至らなかった。近世においては運河空間において都市の魅力を十分に引き出していた舟運であったが、舟運の機能変化により、その役割を果たせなかった高瀬川舟運は衰退し、鴨川運河は舟運の産業用物資輸送という当時の要求を満たしていたため重宝された。

3.2 第二琵琶湖疏水と伏見

第二疏水建設による流量増加に伴い、鴨川運河が、土橋まで延長改造された。また、本事業では当時の、そしてその後の事業勃興に伴う動力の需要に応じ、大規模な電気事業が実施された。京都電灯株式会社は、明治 22 年高瀬川沿いに本社と火力発電所を建設した。近代化政策の代表ともいえる電気事業には発電所建設が必要不可欠であり、舟運は火力用の石炭など燃料の輸送という面からもそれらを

補助していたと考えられる。

3.3 新時代のインフラストラクチャー「鉄道」

近代交通機関の代表ともいえる鉄道は、輸送体系、公共性、といった機能の点で舟運と類似していた。

鉄道は初期の段階では近世以来の都市基盤となっていた舟運を志向し、舟運は鉄道の援護を受けさらなる発展を期待された。舟運によって支えられた工業化は新しい産業を生み伏見の都市構造に変化を与え、舟運によって燃料を供給された電力が鉄道の競争力を伸ばした。しかしこれにより舟運機能の変化（工業志向）を招き、運河空間に集積していた賑わいや都市の魅力は、図-2のように鉄道に誘引されるように都市内へと拡がり、徐々に運河空間を中心とした都市構造が消滅し、分散的構造に変わった。



図-2 大正期伏見の都市施設の立地

4. 近代伏見における運河空間の役割

4.1 伏見における治水

近代伏見に関連する治水事業は、大正11年の淀川改修増補工事伏見方面である。伏見は宇治川からの洪水を、伏見築堤、三栖閘門・洗堰、平戸閘門により防御し、疏水上流からの洪水を、疏水放水路、新高瀬川によって防御しようとするものであった。しかし近世より伏見の都市骨格を形作ってきた濠川と宇治川派流という旧来の水路は、「土砂堆積シテ雑草繁茂シ殆ト汚物捨場ノ感」「幅員統一ヲ欠

キ流水ノ深浅ニ差異著シク且護岸モ亦崩壊シテ危険ニ瀕シ不體裁極リ」と記され、その景観は大きく荒廃していたことがわかる。

4.2 運河空間に求められたもの

図-3は、『京都市水害誌』の中で、1935年（昭和10）の大水害における各地の被害状況を表したものである。伏見においては、かつて浸水で被害を引き起こしていた宇治川（淀川）の逆流もなく、また疏水放水路によって北からの流入も防がれている。都市の魅力ともいえる諸機能が集積した伏見中心部の市街地は水害から防御され、増補工事による治水機能は実証されたといえる。



図-3 伏見の近代治水（『京都市水害誌』より）

伏見における舟運は衰退したわけではなく、治水事業によってその機能は維持された。しかし近代舟運は人々の生活に関わる都市の魅力を運河空間に付加するものではなく、エネルギー源を運搬することを要求された。

5. 結論

本研究は今後の都市デザインのために近世から近代にかけて最も華やかだった運河空間に着目し、インフラストラクチャーと都市及び人々の生活との関係性を考えた。

伏見の運河空間は、貨物・旅客のターミナルとして多くの都市の魅力を集積させたが、近代に入り舟運の性質が、人々の生活と近いレベルで密接に結びついた近世型から、都市経営ともいえる人々の生活を根底から支える都市的なレベルの近代型に徐々に変化した。また、運河空間は治水という面から都市を水害から防御し、深く近代の都市形成に関わっていたといえる。

（主要参考文献・資料） 伏見町役場編：京都市伏見町誌、臨川書店、1972.12 伏見町役場編：京伏合併記念伏見市誌
都市計画京都地方委員会：京阪間の運河計画ニツイテ、1925.1